

無数の心をもつシェイクスピア ―シェイクスピアは何者か―

田村 真弓

1 序論

“myriad-minded Shakspeare”（無数の心をもつシェイクスピア）、イギリスのロマン派詩人、サミュエル・テイラー・コールリッジは、シェイクスピアを称賛してこう呼んだ。イギリスの国民的詩人であり、劇作家であるウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）は、その52年の生涯において、約40編の戯曲と154編の十四行詩、5編の長編詩を執筆し、市井の人々から王侯貴族まで多種多様な人間の心の機微を巧みに描き出したと言われている。こうした偉業をやってのけたシェイクスピアとは、一体、何者だったのか。没後400年を経た現在も、その真相は謎に包まれている。

本発表は、①現存する資料から、ルネサンス期のイギリスに生きたウィリアム・シェイクスピアという人物を再構築し、ストラットフォードのシェイクスピア説を検証する、②これまでに提唱された数々の別人説を考察する、ことを目的として行われた。

2 ストラットフォードのシェイクスピア説

シェイクスピアに関して現存する最初の記録は、ストラットフォード・アポン・エイボンのホーリー・トリニティ教会にある洗礼記録である。この記録の1564年4月26日の欄に、ラテン語で“Gulielmus filius Johannes Shakspere”（ジョン・シェイクスピアの息子ウィリアム）と書かれている。当時、洗礼は誕生後、数日経ってから受けさせるのが習わしだったので、この日付の3日前の4月23日が誕生日だと考えられる。一方、シェイクスピアが亡くなったのは、1616年4月23日で、埋葬はその2日後に行われた。

シェイクスピアの父親ジョンに関しては、多くの記録が残っている。元々は手袋商人だったが、1565年にストラットフォードの町を代表する14人の参事会員の1人に選ばれ、1568年に町長になった。ジョンは、材木や羊毛の取引や不動産売買、高利貸しまでを手広く行い、一家はストラットフォードのヘンリー・ストリートにある屋敷で裕福な暮らしをしていた。母親メアリーは、地元の名家アーデン家の出身で、夫婦の間には8人の子ども

が生まれた。1人目と2人目は幼くして亡くなったので、第3子だったウィリアムが実質上、6人兄弟の長男として育った。

記録は残っていないが、ウィリアム少年は、7歳頃、地元のキングズ・ニュースクールに入学したと考えられる。大学に行かなかったため、後に“small Latin and less Greek”(ラテン語はほとんどわからず、ギリシア語はさらにできない)と揶揄されるシェイクスピアだが、当時の小学校では、ラテン語文法を厳しく教えていたようである。

このように順調だったシェイクスピア一家だが、ある時から生活に翳りが見え始める。1577年、父親ジョンは多額の借金を抱え、町議会に出席しなくなった。こうしたシェイクスピア家没落の理由は大きな謎となっているが、一説には、ジョンが、プロテスタントのエリザベス女王の治世に、前メアリー女王時代のカトリックの教えを守っていたからだ、と推測される。

ウィリアム・シェイクスピアの存在を示す2つ目の記録は、ウスター主教区登録簿の結婚記録である。1582年11月28日、18歳のシェイクスピアは、8歳年上の農家の娘、アン・ハサウェイと結婚した。その後は、長女スザンナの洗礼記録が翌年5月26日にあり、1585年2月2日には、ハムネットとジュディスという双子の洗礼記録が残されている。続いて、1587年9月、父親ジョンが不動産の権利を主張してストラットフォードで裁判を起こした時、息子ウィリアムが立ち会ったという記録がある。

この後、シェイクスピアの記録は忽然と消え、次に劇作家として登場する1592年までの空白の期間は、“the Lost Years”(失われた年月)と呼ばれる。1587年以降消息不明になったシェイクスピアが再び記録に現れるのは、1590年代初頭である。「ウィリアム・シェイクスピア」という名前は記載されていないが、1592年までに、シェイクスピア最初の戯曲『ヘンリー六世』三部作がロンドンの劇場、ローズ座で上演されたことを示す記録が3つ存在し、次いで、シェイクスピアが、詩人、役者として活躍した記録が残っている。

意外なことに、シェイクスピアに関する記録は、演劇以外のものが数多く見られる。1596年10月20日、シェイクスピアの父親ジョンは紋章院に紋章を認可され、ジョンとその子孫は“gentleman”(紳士)になった。この時手に入れたシェイクスピア家の紋章に書かれた標語はラテン語で“non sanz droict”(権利なきにあらず)で、図象は盾の上で鷹が翼を広げ、右足のかぎ爪で金の槍をつかんでいるものである。

こうして紳士の仲間入りを果たし、名士となったシェイクスピアには、税金滞納者や裁判の被告としての不名誉な記録もある一方で、不動産の購入記録も多数ある。シェイクスピアが大金を蓄えていた理由は、彼が宮内大臣一座という強力なパトロンを持った一流の劇団の株主だったことにある。また、宮内大臣一座はエリザベス女王お気に入りの劇団で、

他の劇団に比べて宮廷上演の回数が圧倒的に多かったことが王室財務局の記録からわかる。さらに、貴族の館に招かれてプライベートで上演することもあり、一座は報酬を十分に受け取っていた。役者、劇作家としての収入はわずかでも、株主としてシェイクスピアはかなりの額を稼いでいたと推測される。

1603年にエリザベス女王が崩御し、スコットランド王ジェームズ6世がイングランド王ジェームズ1世として即位した。シェイクスピアの劇団は国王お抱えの国王一座となり、君主が変わってもシェイクスピアは活躍を続けた。

1616年1月、シェイクスピアは遺言状を執筆した。遺産の大部分はホール家に嫁いだ長女スザンナとやがて生まれてくる男の跡継ぎに譲られた。

1616年4月23日にシェイクスピアは他界した。彼の名は、ストラットフォードのホーリー・トリニティ教会の登録簿に“Will Shakespeare gent.”（紳士ウィル・シェイクスピア）と記録され、4月25日に埋葬された。

以上、実在する資料の中から、ウィリアム・シェイクスピアに関する記録を拾い上げてきた。その結果、浮かび上がってきたのは、田舎町ストラットフォードから大都会ロンドンに上京し、詩人、俳優、劇作家として、その才能をいかんなく発揮した一人の人物の姿であった。一方、この人物は蓄財や階級移動にも熱心で、紋章を申請して紳士になったり、故郷に土地や屋敷を買い足したり、という現実的な面も持ち合わせていた。いずれにせよ、ストラットフォード生まれのウィリアム・シェイクスピアという人物が存在したことは、間違いないと言えるであろう。

3 シェイクスピア別人説

ここで生じるのは、この田舎町出身で大学を出ていない人物に、あれだけの学識豊かで人生経験に富む劇を書くことができたのか、という疑問である。シェイクスピア作品にみなぎる格調の高さ、法律、政治、海外事情についての幅広い知識、宮廷との関わりなどを考慮すると、自ずと作者は最高の教育を受けた貴族的な人物だ、ということになる。そこから、シェイクスピアという名を借りて、全く別の人物が作品を書いていたのではないか、という「シェイクスピア別人説」が生まれた。

1) フランシス・ベーコン

別人説には主に7人の候補がいる。1人目は、シェイクスピアと同時代の知識人サー・

フランシス・ベーコン（1561-1626）である。ベーコンは幼い頃から高度な教育を受け、1573年、わずか12歳にしてケンブリッジ大学に進学、その後 그레이ズ・イン法学院に学び、パリに留学し、法廷弁護士の資格を得て、23歳で国会議員となった後、1603年ジェームズ1世からナイトの称号を与えられ、法務次官、法務長官、枢密顧問官、国璽尚書を経て、大法官になった。学術的には、1620年、『新機関』という著作を記し、経験的帰納法を提唱して経験論の基礎を築いた哲学者として名を残した。

最初にフランシス・ベーコン説を唱えたのは、ストラットフォード近郊で教区牧師を務めていたオックスフォード大学卒のジェイムズ・ウィルモットという人物であった。1785年、この牧師が抱いた疑問は、「あれだけの作品を書いたシェイクスピアが、本を1冊も所有していなかったということがあり得るだろうか」というものであった。当時、本は高価で貴重なものだったので、死後、遺言により寄贈されることが当然だった。しかし、シェイクスピアの遺書には、1冊の本も記載されておらず、シェイクスピア自身の手による日記や手紙といったプライベートな物も何一つ残っていない。

かろうじて残っているのは6つの直筆の署名であるが、名前の綴りが一定でないため、反ストラットフォード派の人々は、自分の名前も満足に書けない人物が偉大な劇作家シェイクスピアのはずがない、と論じた。

ベーコン説を熱烈に支持したもう1人の人物は、アメリカ人女性教師、ディーリア・ベーコンであった。ディーリアは、シェイクスピアの謎を解くためのフランシス・ベーコンの書類がシェイクスピアの墓石の下の空洞に隠されていると信じ込み、シェイクスピアの墓を動かそうとしたが、怖気づいたのか、墓を動かすことができなかった。ディーリアは次第に正気を失って、ストラットフォード近くの療養所に入所し、さらにアメリカに戻って療養所に入所し、1859年に48歳で亡くなった。

シェイクスピア＝ベーコン説は、徐々に荒唐無稽なものになっていく。1888年、アメリカ下院議員でSF作家のイグネイシャス・ドネリーという人物が、「シェイクスピアの戯曲の中に、ベーコン自身が作者であることを示す暗号が隠されている」という説を提唱し、これ以後、シェイクスピアの作品に暗号や綴り変えを読み取ることが大ブームになったが、これらは無理なこじつけがほとんどであり、シェイクスピア＝ベーコン説は立証されなかった。

2) クリストファー・マーロウ

次の別人説は、劇作家クリストファー・マーロウ説である。クリストファー・マーロウ

(1564-93) は、権謀術数に長けた、無神論的な超人を主人公とする作品を、叙情性あふれる無韻詩で表現し、エリザベス女王時代の演劇を大いに発展させたが、29歳の若さで、居酒屋の勘定書きをめぐるけんかで、刺し殺されてしまった。この29歳という年齢が、ちょうどシェイクスピアが詩人として活躍を始めた年齢であるため、実はマーロウは生きていて、シェイクスピアという役者を身代わりにして、匿名で執筆を続けていたのではないか、というシェイクスピア＝マーロウ説が誕生した。

クリストファー・マーロウは、イングランド南部カンタベリーの靴屋の息子として生まれた。早熟の天才で、16歳でケンブリッジ大学に入学し、18歳でラテン語の詩を英語に翻訳したり、19歳で戯曲を執筆したりした。一方、その経歴は謎めいていて、ケンブリッジ大学在学中からイギリス政府のスパイとして活動し、無神論者で同性愛者、殺人事件に関与して逮捕されたこともあった。

マーロウが生きていた、という説が最初に発表されたのは、アメリカの弁護士、ウイルバー・ジューグラーが1895年に書いた小説『それはマーロウだった—三世紀にわたる謎』の序文だったと言われている。次いで、1955年にカルヴィン・ホフマンという人物が『シェイクスピアだった男の殺人』という書物を著し、マーロウはフランスで生きていて、正体を隠しながら執筆を続け、イギリスに原稿を送って、シェイクスピアとして作品を発表し続けたのだ、と論じた。1994年には、イギリスのアストン大学のR. マシューズらコンピュータ分析の専門家が、シェイクスピア作品の語彙や文法を分析した結果、『ヘンリー六世』第二部と第三部はマーロウが原作者だったと発表した。しかし、シェイクスピア＝マーロウ説も決定的と言うことはできない。

3) ウィリアム・スタンリー

3人目のシェイクスピア候補は、第6代ダービー伯ウィリアム・スタンリー（1561-1642）である。この人物は、シェイクスピアが活躍した宮内大臣一座の前身ストレインジ卿一座のパトロンだったストレインジ卿ファーディナンド・スタンリーの弟である。そこから、兄の劇団にいた役者の名前を借りて戯曲を発表していた、という可能性が生じる。また、ウィリアム・スタンリーのイニシャルはシェイクスピアと同じW. S. で、故郷はシェイクスピアと同じウォリックシャー州である。

ダービー伯は、オックスフォード大学とリンカーンズ・イン法学院で教育を受け、フランス、スペイン、イタリア、地中海沿岸諸国を旅して各国語に通じ、法律を勉強して、教養も経験も豊富にあった。

ダービー伯説を唱えた人々の中には、本物の学者たちがいた。近世フランス史を専門とし、ルネッサンス時代に造詣の深いコレージュ・ド・フランスの教授アベル・ルフランは、1918年から19年に出版された『ウィリアム・シェイクスピアの仮面の下』という著書の中で、シェイクスピア＝ダービー伯説を主張した。ルフランは、シェイクスピアの戯曲『恋の骨折り損』とナヴァール国との類似性を指摘し、この劇の作者は実際のナヴァール王の宮廷の事情に精通し、宮廷生活の作法を直接知っていたに違いない、と考えた。事実、ダービー伯は、1582年から5年間ナヴァール宮廷に滞在し、劇の登場人物のモデルとなった貴族たちと直に親交を結んだ。

また、ルネッサンス神秘思想を研究した学者フランセス・イエイツは、シェイクスピアの晩年の戯曲『テンペスト』の主人公プロスペローは、エリザベス女王の相談相手だった魔術師ジョン・ディーであり、ダービー伯の領内の無人島が『テンペスト』の舞台であり、ジョン・ディーの親しくしていた貴族ダービー伯が、『テンペスト』の作者シェイクスピアである、と論じた。

しかし、ダービー伯が劇作をしていたのなら、1590年代後半から1620年頃まで活動していた自身の劇団、ダービー伯一座で上演させることもできたはずである。さらに、シェイクスピアの最初のパトロンだったストレインジ卿ファーディナンド・スタンリーは、弟のダービー伯をあからさまに嫌っていたため、ダービー伯が兄の劇団を利用することは、難しかったと思われる。以上のことから、シェイクスピア＝ダービー伯説も信憑性に欠けるのである。

4) エドワード・ド・ヴィア

4人目のシェイクスピア候補に挙げられるのは、第17代オックスフォード伯エドワード・ド・ヴィア（1550-1604）である。オックスフォード伯は武人、宮廷人であるのみならず、詩人で劇作家でもあった。

オックスフォード伯エドワード・ド・ヴィアは、ケンブリッジ大学において14歳で学位を取得し、17歳でグレイズ・イン法学院に進学した。その後、エリザベス女王の寵臣となり、外交や軍事に大いに活躍した、というようにオックスフォード伯は、シェイクスピアの作品に見られる豊富な人生経験を十分に体現しているのである。

オックスフォード伯説を最初に発表したのは、イングランド北部の学校教師ジョン・トマス・ロウニーという人物であった。彼は、1920年に『つきとめられたシェイクスピアの正体』という本を出版した。精神学者のフロイトはこの説に感銘を受け、強く支持したと

言われている。

次にオックスフォード伯説を主張したのは、1952年『このイングランドのスター』という本を出版したチャールトンとドロシー・オグバーン夫妻であった。1984年には、その息子チャールトン・オグバーン・ジュニアが『ミステリアスなウィリアム・シェイクスピア』という本を出版した。

オックスフォード伯説は、現代でも信奉者が多く、2011年に、シェイクスピア=オックスフォード伯説に基づく映画 *Anonymous* (邦題『もうひとりのシェイクスピア』) が公開された。この映画は、当時、「貴族が戯曲を執筆するのは恥」だと考えられていたため、オックスフォード伯が、役者ウィリアム・シェイクスピアを身代わりにして自身の劇を上演していた、という仮説に由来するものである。

オックスフォード伯説の問題点は、オックスフォード伯が1604年にペストに感染して亡くなっているのに、シェイクスピアの作品は1612年頃まで書かれたという点である。これに対して、オックスフォード伯派の人々は、シェイクスピアの全ての作品はオックスフォード伯が亡くなる1604年までに書き終わっていたのだ、と反論する。しかし、1604年以後も、シェイクスピアは若手劇作家と共同で劇を執筆しているため、1604年までに全作品を書き終えたとは考えにくく、オックスフォード伯説も論拠が不十分と言わざるを得ない。

5) メアリー・ハーバート

5人目のシェイクスピア候補は、第2代ペンブルック伯夫人メアリー・ハーバート(1561-1621)である。この人物は、詩人サー・フィリップ・シドニーの妹であり、詩人として、また文学のパトロンとして活躍した。彼女の母親のメアリー・ダドリーは、エリザベス女王の侍女で親友、母親の兄はエリザベス女王の寵臣レスター伯ロバート・ダドリーであった。メアリー・ハーバートは、イタリア語、フランス語、ラテン語に通じ、音楽も演奏する教養人であった。メアリーは15歳で第2代ペンブルック伯ヘンリー・ハーバートと結婚し、子供を出産し、1580年代後半に文筆活動を始めた。彼女は、夫ペンブルック伯の屋敷で、エドモンド・スペンサー、サミュエル・ダニエル、マイケル・ドレイトン、ベン・ジョンソン、ジョン・デイヴィスなど当代一流の詩人たちが集まる「ウィルトン・サークル」を主宰した。また、兄フィリップ・シドニーの著作の出版にも尽力した。メアリーは演劇とのつながりも深く、クレオパトラの生涯を描いたフランス語劇を英訳し、1595年、『アントニーの悲劇』という劇を出版した。この劇に関しては、シェイクスピア作『アントニーとクレオパトラ』への影響が指摘されている。『アントニーの悲劇』は、上演用ではなく、

読書用の劇であり、女性という立場から、メアリーは上演用の劇をウィリアム・シェイクスピアの名で発表したのではないかと推測される。

ペンブルック伯夫人説については、2006年、ロビン・P. ウィリアムズが、『エイヴオン川のすてきな白鳥』という著作の中で詳細に論じている。それによると、メアリーは個人的な図象として「白鳥」を使用しており、エイヴオン川は彼女の領地を流れているので、劇作家ベン・ジョンソンがシェイクスピアを指した“Sweet swan of Avon”（エイヴオン川のすてきな白鳥）という呼び名は、実はメアリーを指していたことになる。残念ながら、シェイクスピア＝ペンブルック伯夫人説にも決定的な証拠は見つかっていない。

6) ロジャー・マナーズ

6人目のシェイクスピア候補は、第5代ラトランド伯ロジャー・マナーズ（1576-1612）である。この人物は、11歳でケンブリッジ大学に入学し、グレイズ・イン法学院で学び、フランス、ドイツ、スイス、イタリアを訪問した。興味深いことに、イタリアのパドヴァ大学在籍中に、ラトランド伯には、戯曲『ハムレット』に登場するハムレットの学友と同じ名前のローゼンクランツとギルデンスターンという2人のデンマーク人の学友がいたと言う。また、ラトランド伯は、1603年、『ハムレット』の舞台であるデンマークの宮廷を訪問し、国王に謁見した。

1912年、ブリュッセル大学のフランス文学教授セレスタン・ダンブロンは、『ラトランド卿がシェイクスピアだ』という本を出版した。ダンブロンは、1613年3月31日、「シェイクスピアと仲間の役者リチャード・バーベッジ」が、第6代ラトランド伯フランシス・マナーズの盾を飾る言葉と図柄を考案したことに対する謝礼を受け取ったことを発見した。こうしてシェイクスピアが第6代ラトランド伯と付き合いがあったのだから、父親の第5代ラトランド伯とも関係があったのではないかと、もしくは第5代ラトランド伯がシェイクスピアその人だったのではないかと、というのがダンブロンの説である。また、ラトランド伯は、サー・フィリップ・シドニーの娘エリザベスと結婚して、エセックス伯の義理の息子となり、エセックス伯の遠征と反乱に加わった。これは、シェイクスピアがエセックス伯の親派だったことと符合する。さらにラトランド伯が、シェイクスピアの劇作が終了したと考えられる1612年に亡くなっていることも説を裏付ける。

しかし、ラトランド伯はシェイクスピアより12歳も若く、作品の創作年代を考えると年齢的に無理があるため、シェイクスピア＝ラトランド伯説も却下せざるを得ない。

7) ヘンリー・ネヴィル

7人目のシェイクスピア候補は、外交官サー・ヘンリー・ネヴィル（1564-1615）である。この説は、2005年、ポーツマス大学の英文学の非常勤講師ブレンダ・ジェームズと歴史学の大家ウィリアム・ルービンシュタイン博士が共同執筆した著作『真実は暴かれる—本当のシェイクスピアの正体を明かす』で公表された。ネヴィルはオックスフォード大学卒業後、宮廷に出入りするようになり、フランスで外交活動をしたが、エセックス伯の反乱にかかわった罪でロンドン塔に幽閉され、後に釈放された。幽閉中に四大悲劇を描き始めたと言うが、幽閉中は芝居の稽古に立ちあえないので、劇のト書きをもっと詳しく書く必要があることや、芝居好きだったわけでも、演劇界と関わりがあったわけでもないのが、この説を弱めている。

8) グループ執筆説

さらには、グループ執筆説というものもある。何人かが集まって合作したということになれば、語彙の多さや人生経験の豊富さを説明することができるのである。

最初にグループ説が披露されたのは、1881年、A. モーガンが著した『シェイクスピア神話—ウィリアム・シェイクスピアと状況証拠』という本であった。次いで、1931年、ギルバート・スレイターは、著書『七人のシェイクスピア』の中で、クリストファー・マーロウ、フランシス・ベーコン、オックスフォード伯エドワード・ド・ヴィア、ダービー伯ウィリアム・スタンリー、ラトランド伯ロジャー・マナーズ、ペンブルック伯夫人メアリー・ハーバート、そして、軍人、政治家、詩人として活躍したサー・ウォルター・ロリーの7人が、チーム「シェイクスピア」を結成して執筆活動を行ったと推測した。1966年のA. J. エヴァンズの著作『シェイクスピアのマジック・サークル』では、貴族ではないマーロウが脱落し、代わりにラトランド伯夫人が加わっている。

現在、日本の漫画雑誌で、『7人のシェイクスピア』という漫画が連載されている。この漫画も、7人の合作説を取っているが、チーム「シェイクスピア」のメンバーは、歴史上の人物たちではなく、それぞれ詩や文学、音楽に秀でた能力を持つ庶民たちである。彼らが協力し合って、シェイクスピアの劇を作り上げていた、という筋立てになっている。

4 結論

以上、様々な説を考察してきたが、結局、シェイクスピアの正体をめぐる議論は、それぞれの説を支持する人のアイデンティティと深く関わっていると言っていることができるであろう。シェイクスピアは隠れカトリックだったと論じて学会を沸かせた私の恩師、ピーター・ミルワード先生は、ご自身がカトリックの神父様であったし、シェイクスピアが演劇の都ロンドンに憧れて上京したと信じる、もう1人の恩師、安西徹雄先生は、ご自身も志を持って愛媛県から上京した演劇人であった。そして、本人説を信奉するストラットフォードの町の住人たちは、もし偉大なる劇作家ウィリアム・シェイクスピアがストラットフォード出身でなければ、シェイクスピア産業が消滅し、生活の糧を失ってしまうかもしれないのである。要するに、シェイクスピアについて語ることは、自分自身について語ることであり、シェイクスピアの正体をめぐる議論は、今後も人々の知的好奇心を刺激する謎であり続けることだろう。

参考文献

- アクロイド、ピーター『シェイクスピア伝』河合祥一郎、酒井もえ訳。東京、白水社、2008年。
安西徹雄『仕事場のシェイクスピア』東京、ちくま書房、1997年。
ウィルソン、イアン『シェイクスピアの謎を解く』安西徹雄訳。東京、河出書房新社、2000年。
河合祥一郎『シェイクスピア』東京、中公新書、2016年
河合祥一郎『シェイクスピアの正体』東京、新潮社、2016年。
グリーンブラット、ステイーヴン『シェイクスピアの驚異の成功物語』河合祥一郎訳。
東京、白水社、2006年。
ミルワード、ピーター『シェイクスピアは隠れカトリックだった?』中山理、安田悦子訳。
東京、春秋社、1996年。

映画

- エメリッヒ、ローランド監督 *Anonymous* 邦題『もうひとりのシェイクスピア』
ジョン・オーロフ脚本。コロンビア映画、2011年。
マッデン、ジョン監督 *Shakespeare in Love* 邦題『恋におちたシェイクスピア』
トム・ストップード脚本。ミラマックス、1998年。

漫画

- ハロルド作石『7人のシェイクスピア』第1巻-第6巻。東京、小学館、2010-12年。
ハロルド作石『7人のシェイクスピア NON SANZ DROICT』第1巻-第6巻。以下続刊。
東京、小学館、2017-18年。